



目次	
●巻頭言	1
●全公教岩手大会参加報告	2
●特集	3～4
●郡市教頭会ネットワーク	5
●新入会員の声	6
●随想	7



学校で学ぶ意義 今改めて考える

新潟県小中学校教頭会

副会長 **長谷川 聡 実**

(新潟市立東新潟中学校)

「話し合は、一石三鳥ですね。」

6月に国語の授業で、文学の解釈や自分の疑問を班の仲間と話し合う場面を設定した後、今日の学びの振り返りを書いている時にある生徒が、しみじみと言った言葉である。私は、「一石二鳥ではなく三鳥、どんな意味か学級の仲間に教えてくれる？」とその生徒にお願いした。その内容である。

話し合いをすると①自分の読みが深まる、考えが深まる。②班の仲間の読みも考えも深まる。③自分も班の仲間も読みが深まる、自分の疑問や考えを自由に話せる、そしてよく聴いてもらえて一緒に悩んでくれる、そのことが嬉しいし、楽しい。

この言葉には、重みがある。子ども自身が、自分の言葉で、学校で共に学ぶ意義を語っているからである。この言葉は、子ども自身の実感、納得の中から生まれてきた。以来、授業で話し合う場面があるときは、「今日も一石三鳥！」が合言葉になった。

中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』で「個別最適な学びと協働的な学び」が示された。私は現在、学習履歴（スタディ・ログ）などの教育データを活用した「個別最適な学び」について研究している。その際、気を付けているのが「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」である。「個別最適な学び」の充実は、「個別

最適な学び」だけを考えていても実現しない。「個別最適な学び」は、「協働的な学び」によって一層豊かなものになる。そして、「協働的な学び」もまた、「個別最適な学び」によってより豊かになる。このことの重要性を、「話し合は、一石三鳥ですね。」という令和の時代を生きる生徒の言葉によって、改めてかみしめた。学校で学ぶ意義を踏まえながら、令和の日本型学校教育を確実に構築し、これからの時代をたくましく生きる力をどの子どもにも育ていくために教頭ができること、すべきことは何かを再考し、実行していきたい。

11月4日に第58回新潟県小中学校教頭会研究大会 長岡・三島大会がオンラインで開催される。研究主題は、「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり（自立・協働・創造）～夢・志をもち、他者と協働しながら未来を拓く子どもを育む学校づくり（3年次）」である。教育課程、子どもの発達、教育環境整備、組織・運営、教職員の専門性に関する課題について各分科会で提言発表がある。小学校、中学校の優れた先行実践に学び、日頃の問題意識を解決する場としたい。令和の日本型学校教育、魅力ある学校づくりについて新潟県の小中学校が共に学び合う貴重な学びの場である。

当日は、新潟県の全小中学校教頭の総力を結集して、「一石三鳥」の教頭研究大会 長岡・三島大会を創っていきたい。

全公教岩手大会参加報告



全公教 岩手大会に参加して

糸魚川市立下早川小学校

八木 千佳誉

7月28日29日の2日間、全国公立学校教頭会岩手大会にオンラインで参加させていただきました。

1日目は、「るろうに剣心」「億男」等の映画監督大友啓史氏による「アドリブ力を育てる」と題したご講演をお聞きしました。撮影現場でのエピソードを交え、映画1本に関わる300~400人のスタッフやキャストの「組織としてのまとめ方」や「モチベーションの上げ方」を話されました。「映画作りも教職もクリエイティブな仕事である。目の前のことに真剣に向き合い、ごまかさず、愛情をもって取り組むことが大切である」と、語られました。

シンポジウムでは、3名のシンポジストが「岩手の復興教育」について意見を交わしました。文科省安全調査官の森本晋也氏は、「若い人が語り継いでいくことや自分事として考える防災教育の重要性」を、宮古市教委教育長の伊藤晃二氏は、「学区全体での防災訓練をCSが主体となって行う必要性」についてお話しされました。また、前岩手県中学校長会長の松葉覚氏はこれからの人づくりのために「育てたいことの明確化」「発達段階に応じた教育」「学校から社会へ、子どもたちからの発信」が大事であると話されました。

2日目は第3分科会に参加し、多くの方々と意見交換ができました。3つの提案発表をもとに、各都道府県や市町村の実態、成果や課題について情報交換を行いました。GIGAスクール構想の実現に向け、先行実践的な取組について情報を収集し、成功事例を自校化することや、学校支援コーディネーターと連携して児童生徒の学習の場を広げ、地域全体で子どもの成長を支える礎をつくっていくことなど、教頭の役割を再確認しました。

本大会の多面的なお話から、自身の考え方を広げることができました。様々な課題に向き合う今の業務を、決して一人職と捉えず、縦横のつながりを大切にしていこうと思えた、充実した2日間でした。



全公教 岩手大会に参加して

佐渡市立両津小学校

土屋 勝 顧

今年度の全公教岩手大会は、新型コロナウイルスの感染防止から、ハイブリッド大会となりました。全国統一研究主題「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」を踏まえ、サブテーマ「郷土に愛情と誇りをもち 未来を生きる力を身に付けた子供の育成を実現する学校づくりの推進」をもとに、全国の副校長、教頭先生方と協議・情報交換が行われました。

1日目の記念講演では、岩手県盛岡市出身の映画監督、大友啓史氏（[主な著書・作品等] 大河ドラマ「秀吉」「龍馬伝」、朝の連続TV小説「ちゅらさん」、「ハゲタカ」「るろうに剣心」等）から「アドリブ力を育てる」をテーマとしてご講演いただきました。大友氏からは、映画やドラマ制作の現場でのエピソードをベースに、組織での突破力やモチベーションの上げ方、想定外の出来事に対する臨機応変な考え方・対応力＝アドリブ力について話されました。

また、シンポジウムでは、著名な4名の方から、『いわての復興教育』が目指す、郷土を愛し、未来を切り拓く人材の育成」をテーマに語っていただきました。その一人一人の言葉もそうであるが、心に残ったことは、岩手県では、東日本大震災津波から教育の復興をめざし、各校で「いわての復興教育」を共通して取り組んでいることです。自分が生まれ育った郷土や自分を取り巻く環境を大切にしていこうとする心情を育てることが、持続可能な社会の担い手としての資質・能力等を身に付けさせていくための必要不可欠であると考えているからです。

この岩手大会の主旨は、(1)「未来を生きる力」を育む学校教育を考えること (2)「魅力ある学校づくり」を考えることです。「未来を生きる力」の育成と「魅力ある学校づくり」の達成のためには、副校長・教頭がリーダーシップを発揮し、保護者や地域と連携協力しながら、教育課題の把握とその具現化を進めていかなければならないと感じました。私にとってとても有意義な研究大会でした。

特集

GIGAスクール構想に向けた取組の現状

ICT機器の効果的な活用を目指した
学習指導の取組における教頭の役割

刈羽村立刈羽中学校

梅田 茂明

当校の令和4年度NRTの結果から、基礎・基本の定着が十分でない生徒が一定数いる。また、刈羽村教育委員会では「ICT機器を活用し、児童・生徒一人一人により個別化された指導を通じ、基礎・基本の習得を確実にし、思考力・判断力・表現力等や自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度を育成する。」を今年度からICT教育基本方針としている。

以上から、「生徒たちの基礎・基本の習得のために、ICT機器を効果的に活用すること」をICT教育の推進における当校の課題と設定した。研究推進・学習指導部とICT教育部が連携して推進している。

1 課題解決に向けた主な方策と具体的な取組

(1)教頭が校内研究推進・学習指導部会に参加し、適切な指導・助言をする。

①AI型タブレット教材Qubenaを個別最適な学びの核となるよう効果的な活用を構築する。

□各教科の年間学習指導計画に、Qubenaを活用する時期を明記する。

□5教科におけるQubena活用による教育効果(質的評価・量的評価)を測定するために、Qubena活用実践計画を作成する。

②(タブレットの利用を含む)「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法等における職員研修を実施する。

(2)外部との連携を強化し、取組を充実させる。

①刈羽村ICT教育推進会議に教頭も参加する。

②ICT支援員とICT教育部担当職員及び教頭との打ち合わせを丁寧に行う。

2 今後に向けた方針

ICT機器の効果的な活用により、生徒たちが自主的に家庭学習に取り組む割合が高くなった。しかし、「個別最適化された学び」が「孤立した学び」に陥らないよう留意しなければならない。そこで、探究的な学習や体験活動を通じ、生徒同士あるいは他者と協働する学習活動にICT機器を活用することも、全校体制で実践していけるよう、教頭としてICT教育部を積極的に支援していく。

小千谷市のICT教育の現状と
今後の推進に向けて

小千谷市立片貝中学校

佐藤 壮

「家族が発熱したのでどうすればよいですか?」「〇〇さんは、出席停止になります。リモート授業を行いますので、タブレットを取りに来てください。」学年部の職員が、タブレットと充電器、学習セットを準備する。こんな光景が当たり前になっている。

小千谷市教頭会では、各校に整備されたICT教育機器の有効な活用方法や教職員個々のICT活用指導力の向上について意見交換し、市教研ICT研修委員会に教頭会代表が副会長として参加し、各校の現状をもとに推進方法を教育委員会に提案している。

小千谷市では、今年度より、教師用端末が一人一台配当になり、Teamsを使用した集会や研修、ミライシードを活用した授業づくりを進めている。中学校では、生徒総会の議案書をタブレットで閲覧する形にしたり、生徒アンケートでFormsを利用したりしている。持ち帰りについては、ノートパソコンホルダーなどを購入し、持ち帰り時の使用の約束を、市教委から共通の使用方法についての文書を基にして各校の実態に合った使用方法を作成した。さらに、校務支援システムC4thやC4th Home&Schoolが導入され、欠席連絡や体温報告について、保護者の朝の手間も省くことができるようになった。

現在、児童生徒は、タブレットによる授業などに柔軟に順応しており、オンライン授業も各校で順調に進んでいる。さらに、研修も積極的にTeamsを利用し、校務支援システムによって、文書によってやりとりしていた内容が全てC4thで対応できるようになり、業務内容の精選・削減につながっている。

今後の課題は、教職員間におけるICT活用指導力の格差が生じているため、教職員の指導技術やICTに係る知識の向上が鍵となる。このために、教頭会として各校の現状を把握した上で、具体策を市教委に提案していくことが重要であると考えている。

特集

GIGAスクール構想に向けた取組の現状

ICTで広がる
教育の可能性

燕市立燕南小学校

国本 力

燕市では、一人一台 chromebook が整備され、活用を進めている。学習活動はもちろん、リモート学習をはじめ、家庭学習への活用にも取り組んでいる。

学習や活動において、それぞれの取組と効果は以下のようなものである。

- ①授業支援ソフトを使った、課題解決や、思考の共有、話し合い活動では、課題に対し必要な写真や資料を主体的に集める姿が見られた。また、自分の考えと他者の考えを比較しやすいことで話し合いが活発に行われていた。
- ②Jamboardなどを使って、話し合いや思考の交流を行う時、グループ内で個々の考えの内容や方向性をまとめやすく、思考の流れを確認することができた。
- ③学習や活動などのアンケートにFormsを使うことで集約が容易になり、活用しやすくなった。
- ④コロナ禍と言うこともあり全校集会、児童会行事等でGoogle Meetを活用した。行事等では、映像ファイルなども活用し、学年の出し物など新たな発表方法を生み出すことができた。

この他にも、校内研修の中で、授業では画像や意見等をタブレットに記録して、協議会に活用したり、協議会での意見等を集約したりしている。GIGAスクール構想により一人一台の端末を使用できることで、教育の可能性が広がってきている。家庭でも端末を使用することができ、今後更なる使用方法の開発が進んで行くと思われる。

しかし、便利な反面課題も多く、家庭で使用する際、ルールが守られていなかったり、違った使い方をしたりしてしまうことや、特に低学年などでは情報モラルの定着が難しい側面がある。ICTを推進するにあたって、保護者との連携を大切にして取組を進めていきたい。

ICT機器の活用で
教育的効果を高める

五泉市立巢本小学校

横山 貴司

ICT教育環境の充実は、「五泉市教育振興基本計画」の中の施策の一つである。

1人1台端末の整備により、ICT機器を活用する場面が増えた。子どもたちが情報や情報技術を適切に活用し、学習意欲が一層高まる授業ができるよう、ICT教育環境の整備の継続が求められている。

また、「五泉市の学校教育」では、GIGAスクール構想を進めるための今後の方針等の中に、目指す児童生徒の姿を具現するため、「ICT機器を活用した授業の推進」を努力事項に掲げている。

五泉市では、昨年度、ICT活用推進指定校制度を実施し、校内でのICT活用とそのため研修を進めてきた。各校においては、日常的にICT機器を活用した授業が実現されてきている。今年度は、より教育的効果を高めるためにICT機器を活用するという段階への移行を目指している。

当校でも、ICT機器を活用した授業改善に取り組んでいる。特に、児童全員の考えがリアルタイムに共有されるよさを実感している。

児童は友達の考えに触れることで、解決のヒントを得たり自分の考えを修正したりと、主体的に学ぶ姿が見られるようになった。教師も、児童一人一人の反応を把握できるため、つまずきの大きな児童に個別に対応するなど、効率的な指導ができるようになった。しかし、児童同士が交流する中で新しい考えを生み出すなど、教科の学びを深めるまでには至らない。

そこで、今年度、「共に深まる学び合いの充実」を校内研修のテーマの中に位置付けた。プレゼンソフトを使って共同編集しながら考えを共有したり、コメント機能を用いてアドバイスし合ったりしながら協働する活動を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。ICT機器を活用した実践を一つ一つ積み重ねながら、児童も教師も実感をもって高まり、教育的効果の向上に努めていきたい。

都市教頭会ネットワーク



魚沼市小中学校 教頭会の紹介

魚沼市小中学校教頭会
会長 小野塚 眞 郎
(魚沼市立堀之内小学校)

魚沼市小中学校教頭会は、小学校9校、中学校5校、全員で14人の教頭会組織です。コンパクトである利点を生かし、教頭同士が気兼ねなく情報交換・相談できる関係を構築しています。

1 組織と事業等について

魚沼市は地理的に広いため、①入広瀬・守門郷(3人)②湯之谷・広神郷(5人)③小出・堀之内郷(6人)の3郷ブロックとし、各ブロックから役員と事業を分担しています。

事業は可能な限り同じ曜日(木曜日)、同じ時間帯に計画し、全員が確実に出席できるようにしています。常任委員会は年3回開催。総会は春季と年度末に開催。研修会を秋に開催しています。

また、各校教頭は魚沼市の「新・温かい学級づくり推進事業」(WEBQUを生かして多様な個性を認め合う学級集団づくりを目指すことで学びを育み、人とかかわりづくりを支援する)の校内事業統括者を任されています。教頭は、この事業の推進役であり、実効性のある取組にするため、市教育センターの指導を仰ぎ、継続的に研修を行っています。

10月6日に市教頭会「秋季研修会」を開催します。研修会は2部構成とし、第1部を市教育センター統括指導主事より「新・温かい学級づくり推進事業」について講話をいただきます。第2部は「各校の課題解決に向けた話し合い」をグループで協議します。①コミュニティスクール②学力向上③働き方改革④行事等、学校運営の工夫の4つのテーマで時間を区切って、グループ編成をかえながら協議を行います。情報交換で得た価値ある内容を業務推進に役立てています。

2 課題等について

現在、学校の統合等により、ブロックで構成されている本市教頭会組織について再編成が検討されています。「顔がよく見える」そして「気軽に相談し合える」組織になるよう全会員で進めていきます。



互いに知恵を出し合って

阿賀野市小中学校教頭会
富 樫 晃
(阿賀野市立安野小学校)

阿賀野市小中学校教頭会は、小学校8校、中学校4校、計12名の会員で構成されています。それぞれの会員が、日々の業務に奮闘しています。当会の規模が大きいため、互いの顔がよく見え、気軽に何でも相談し合えることが、自慢の一つです。また、教頭としての資質・能力の向上を図るため、定期的に教頭会を開き、研修を重ねたり情報交換をしたりしています。

1 次年度下越Bブロック研究大会に向けて

次年度、本市教頭会は、下越Bブロック研究大会で発表を予定しています。発表テーマ「地域連携をさらに推進させ、ふるさと阿賀野市への誇りと愛着をもつ児童生徒の育成」について、各校の地域連携の取組の成果や課題などの情報交換を行いながら、次年度の発表内容がよりよいものになるように、互いに知恵を出し合っています。特に、教頭会の折に、グループで地域連携についての課題は共有し、それぞれの勤務校での取組に生かしたり、次年度の発表内容を練り上げたりしています。

また、阿賀野市教育委員会管理指導主事から実効ある地域連携について御講話をいただくなど、積極的に研鑽に励んでいます。



2 教頭会として

阿賀野市の教育基本理念「ふるさとを愛し、未来を切り拓いていく人を育てる教育」の実現を目指し、教頭会としてできることを実践していきます。

今後も、教頭同士のネットワークを大切に、日々情報を共有しながら、日々の業務に邁進していきたいと思っています。



実力をつけることだけ

三条市立笹岡小学校
石原 淳 一

～何をするにも自分の評価や待遇を気にする人がいる。力のない人ほど心配する。そんな心配をする暇があれば、とにかく実力をつけることに専念しよう。実力さえつければ、どこでも、誰からも評価され、思う通りに受け入れられるから～

浜口 直太 著【勝つと決めたものだけが勝つ】

高校生の息子の野球部便りで見つけた言葉ですが、今の私の心には、とてもしっくりときます。

4月、55名の児童と1匹のヤギの「はなちゃん」に迎えられ、新任教頭として赴任しました。小中一貫教育、コミュニティ・スクール、ヤギとイチョウと学ぶ学校…等々。そのためには、正に、教頭としての実力をつけることだけが必要です。

子どもたちの、保護者の、地域の方々の、そして職員の「笑顔があふれる」学校にしたいと願う校長の指導の下、「やってみよう！」と努力して参ります。



信頼される 教頭を目指して

新潟市立木戸小学校
高橋 新 一

新年度を迎え、子どもたちが学校に来た初日、「こんにちは、新しい教頭先生ですか。よろしくお願ひします。」廊下で居合わせた子どもたちが、笑顔いっぱいであげてくれました。

新任教頭として赴任してから、多くの方々と関わりながら職務を遂行できる日々幸せを感じています。保護者や地域の方々の学校に対する期待、それに応えようとひたむきに子どもたちの指導に当たる教職員と共に過ごしていると、「全ては子どもたちのために」自分も頑張らなければならないという思いがさらに強くなります。

私が常に意識していることは、いろいろな目線（児童・保護者・地域）で学校のことを考えるということです。日頃からアンテナを高くして、多角的に物事が考えられるよう努力を積み重ね、信頼される教頭を目指します。



子どもたちのために

新潟市立赤塚中学校
佐々木 忠 洋

教頭として赴任して半年が経とうとしています。赴任当初は慣れない業務と提出文書に追われる日々の連続で、自分自身気持ちに余裕のない時期が続きました。そんなある日、ハッとさせられる出来事がありました。授業で生徒が「先生、できたよ！」と私に課題を見せに来た時の笑顔でした。その生徒の表情は私にはとても輝いて見えました。その時、自分が目先の事ばかりに気をとられ、周りを見ていなかったことに気づかされました。

周りを見ると、佐潟の豊かな自然、熱意溢れる教職員、学校に協力的な保護者・地域の方々、そして明るく輝いている子どもたち。

今では、子どもたちがもっともっと輝いていけるように日々感謝と精進しながら職務に励んでいます。保護者や地域から信頼される学校づくりに取り組んでいきます。ご指導をよろしくお願いいたします。



学び、活かす

佐渡市立佐和田中学校
金子 幸 弘

今まで意識しなかった管理職の仕事の多さと責任の重さを感じながら、充実した日々を送っています。現任校は以前に勤務した学校ですが、立場が違うと見方や感じ方が異なったり、世代の違いを感じたりしています。

管理職になると、今まで以上に周囲の先生方の動きや生徒との関わり方が見えてきて、今なお学ぶことが多いです。また、生徒と共に考え、活動し、楽しそうに生徒と話す先生方の姿を見ると、先生方の日々の取組に感謝するばかりです。

昨年までの教諭としての立場と今の管理職としての立場との違いで判断に悩むこともありますが、校長先生からご指導をいただきながら頑張っています。

学校運営の軸となる管理職として、適切で素早い判断を心がけ、多様な見方や考え方を学び、それを活かして、生徒の居場所づくりと働きやすい職場環境づくりを心がけていきます。

随 想



指導の軸

南魚沼市立八海中学校

小林 一 治

先日、当校の部活動を指導してもらっている方(教員ではない)が、次のようなことを生徒に話してくれました。「部活動の目的は、縦軸(自分自身)を伸ばすことであり、横軸(他者との比較)は目標の一つに過ぎない。」私はこの言葉を聞いて、はっとさせられました。

これまでの自分の部活動の指導を振り返ると、横軸が指導の軸となり、大会等で結果を残すことが第一になっていました。また、横軸の視点では他者(校)は、無数にいますから、いつまでたっても満足はできません。他者(校)と比較する横軸で見ることが中心となっていますから、たまに縦軸で生徒を見ても足りないところばかりが目についてしまいます。ただ、縦軸だけを見ていると、井の中の蛙状態になることもあるので、横軸を上手に使うことも時には必要なと思います。

様々な価値観や多様性が尊重される時代に、横軸視点よりは、縦軸を視点にして、昨日、一ヶ月前、一年前、それぞれの自分と比較すれば成長が実感できるはずです。この考え方は、英語科の学習指導で定着してきている「Can-Doリスト」や「バックワードデザインによる単元構成」にも通じるころだと思えます。英語科に限らず、各教科で振り返りの時間を大切にしていることも、子どもたちに縦軸の視点を与えているのだと思えます。

現在の自分自身を振り返っても、縦軸で生徒や教職員の成長を見取ることができていないと反省するばかりです。自分自身がロールモデルとなり、生徒や教職員をしっかりと見取り、成長の過程を認め、成長を褒めていきたいと思えます。



『ジェネレーター』から考える働き方改革

新発田市立川東小学校

徳 富 大 吾

新任教頭として着任し、半年が過ぎた。まだ、日々の仕事をこなすことに精一杯で学校をつくるという段階には到底至っていない。しかし、日々、先生方の声に耳を傾け、子どもたちの姿を見つめ、自分なりにより子どもや先生が生き生きと学び合える学校にしたいと思い、考えを巡らせている。

少し心身に余裕ができた夏季休業中に『ジェネレーター』という本を読んだ。これまでは、教師がファシリテーターとなり、子どもたちが主体的に学ぶ授業を俯瞰的につくっていくことが主流であった。しかし、ジェネレーターという存在は、一緒に参加して盛り上がりをつくる。内側に入って共に活動するので、教師と子どもはお互いに学び合い、教育し合うスーパーフラットな関係性となる。それが、『ジェネレーター』の前提である。

学校現場では、長く「働き方改革」の推進が行われている。しかし「多忙感=超過勤務」の考えが先行し、「数字上の改革」で留まっているように感じられる。適正な労働時間も当然大切だが、ジェネレーターのように子どもたちと共に学びをつくり、共に感動し、共に成長していく…そんな「働き方改革」「学校改革」も必要ではないだろうか。

自分は、学校のジェネレーターとなり、同僚の先生たちや子どもたちと「気になる」「面白そう」「やってみよう」という思いを共有し、行動し、学校をつくっていききたい…それが自分らしい教頭像！その自分らしい教師像に近づいていくことが私の働き方改革！